Vol.10 ●とじこみスペシャル COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド

コミックと小説ならおまかせのコーナーです!!



RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!! そんな欲ばりなあなたのためのコーナーです!!

CONTENTS

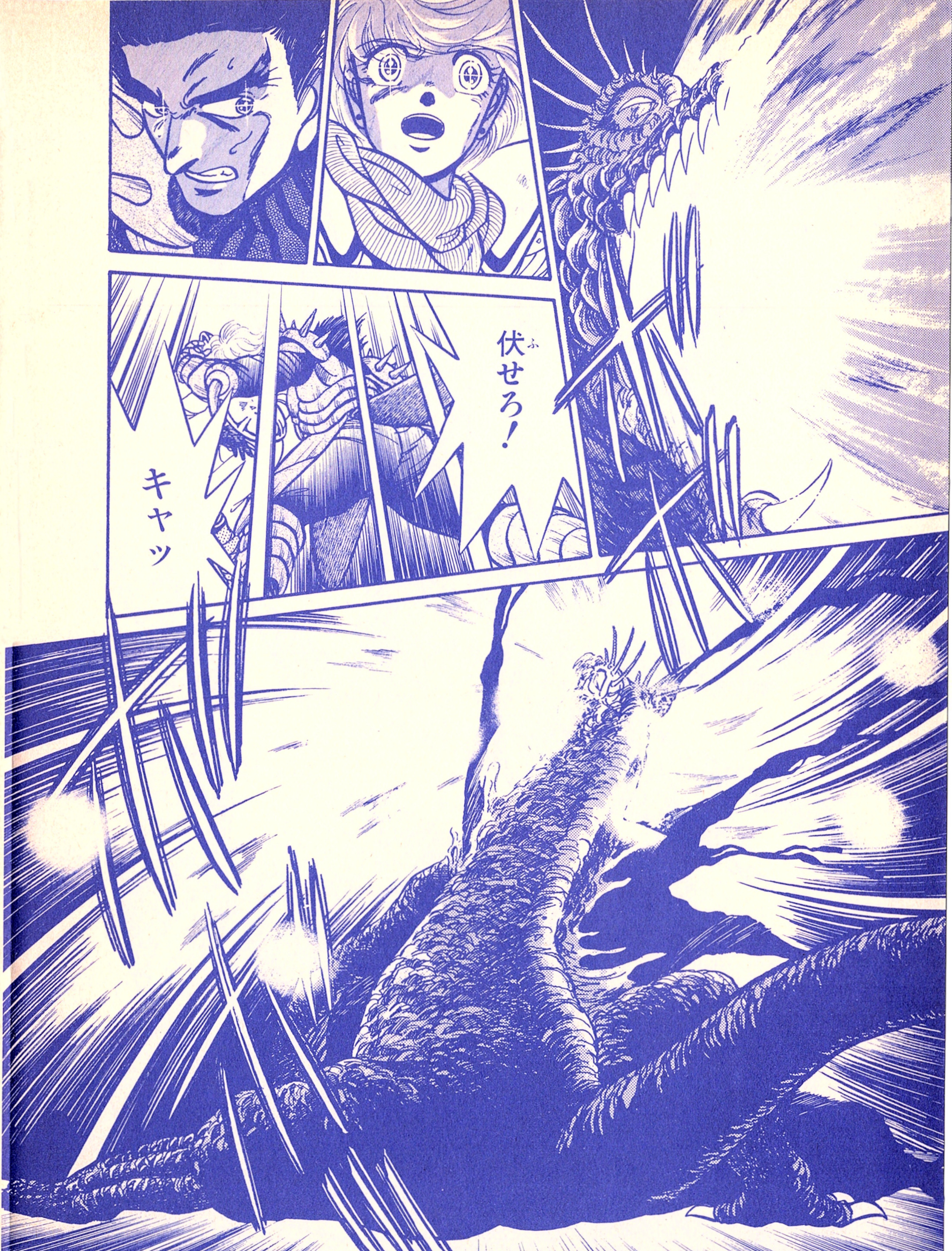
FANTASY LAND

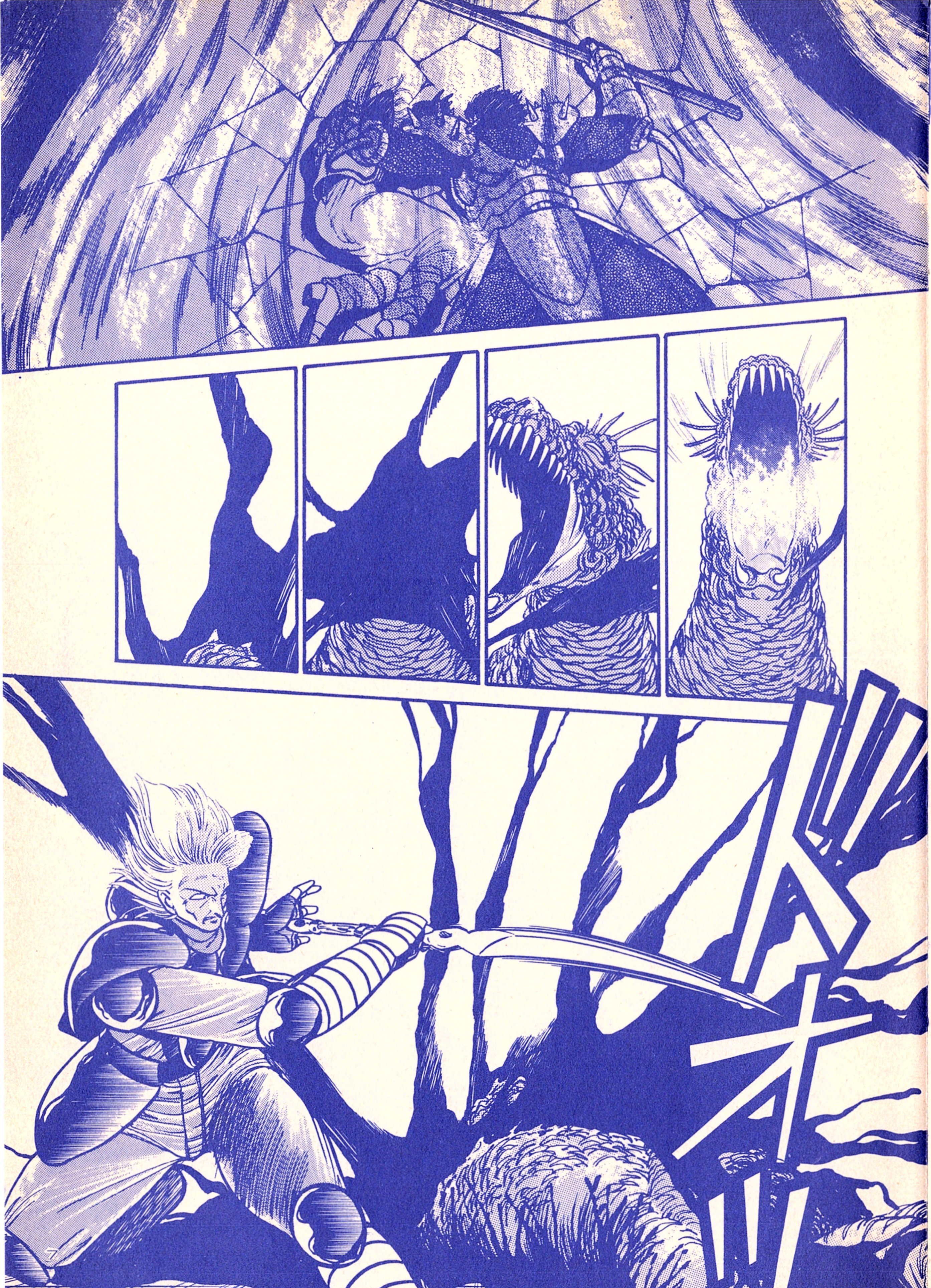
Wizardry®




電火竜（ファイヤー・ドレイク）だ！
緑竜（グリーンドラゴン）のを遥（はる）かに凌（しの）ぐぞ！
早目（はやめ）に斃（たお）せと云（い）うことか
そうだ！
一匹（いっぴき）はショウに任（まか）せろ！
判（わか）った！
こいつのブレスは
おおーっ！




伏せろ！
キャッ


ドオ


ショウは!
ショウ………
ショウ!



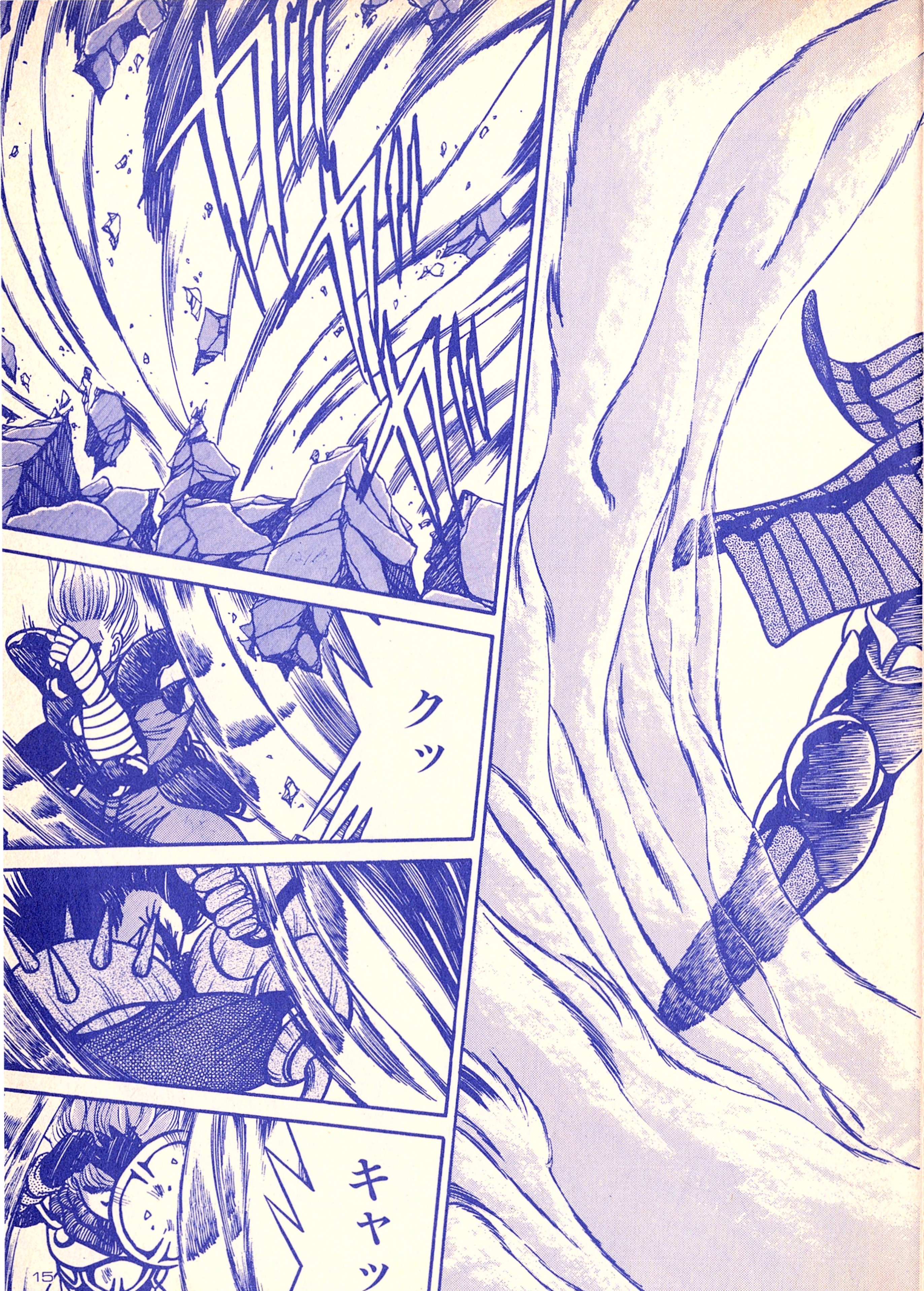

一発喰らった後か——
じゃあ治療を!
——にしては顔が綺麗過ぎるな
……電火竜のブレスだぞ
シ——
サンザさんどうして!
いいから見ていろ


老人の正体が何であれ
今は関わりの無いことだ忘れろ！さもなければショウ！
お前はもう一人の使い手に・・・
いや！己自身に斃されることになる！
それは

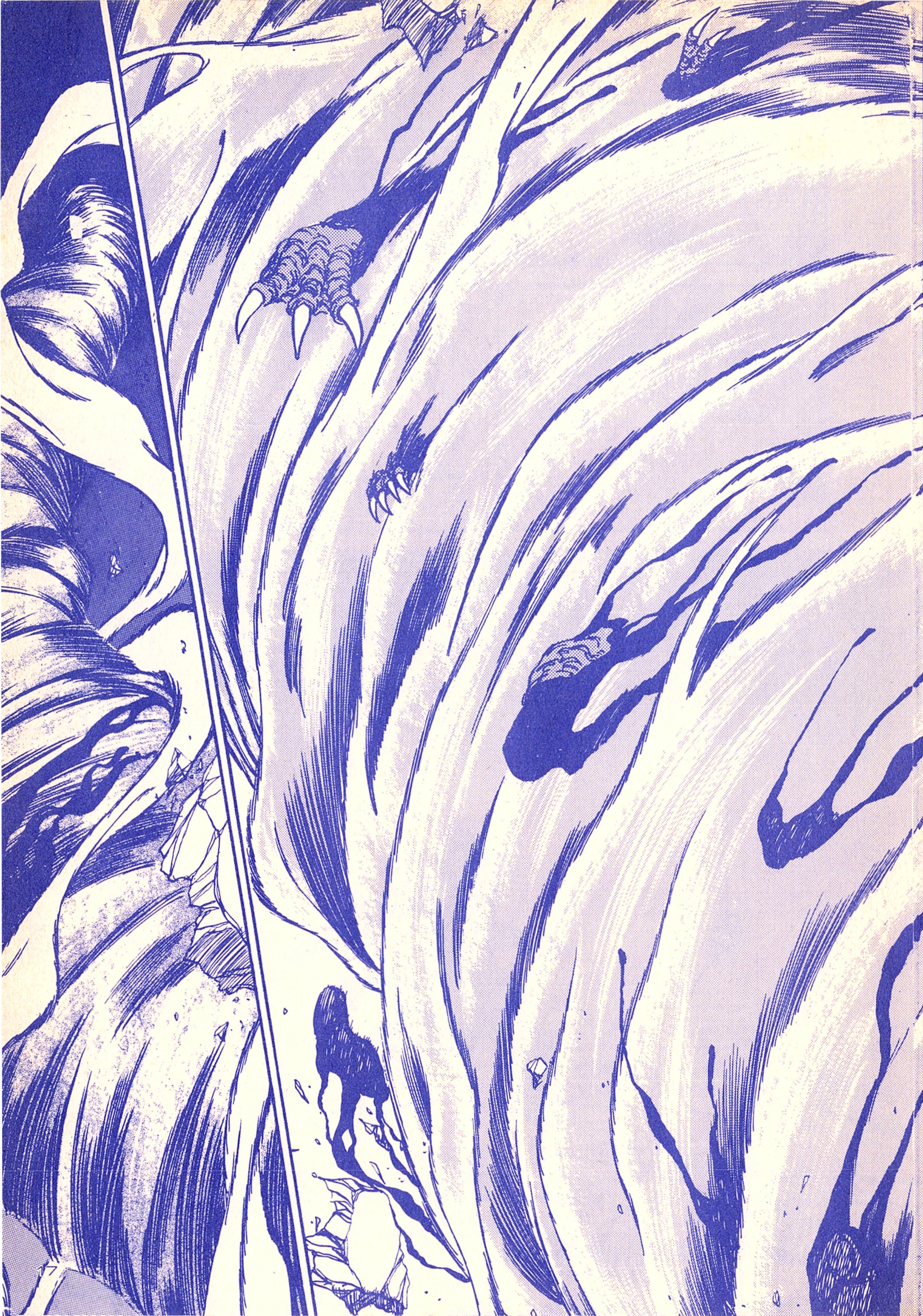

望まぬ！

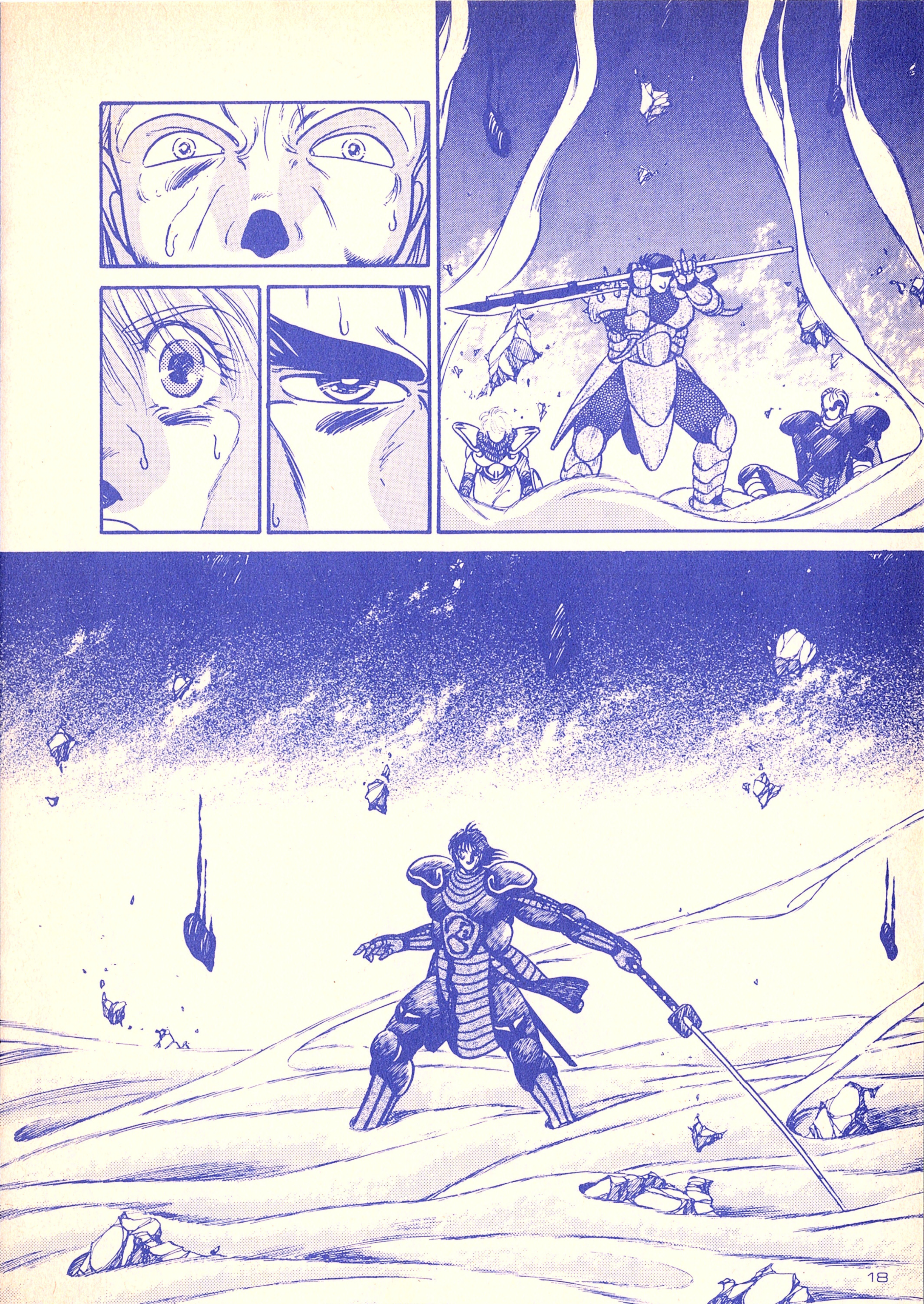

鳳龍（ほうりゅう）——


れっぷうざん
烈風斬！

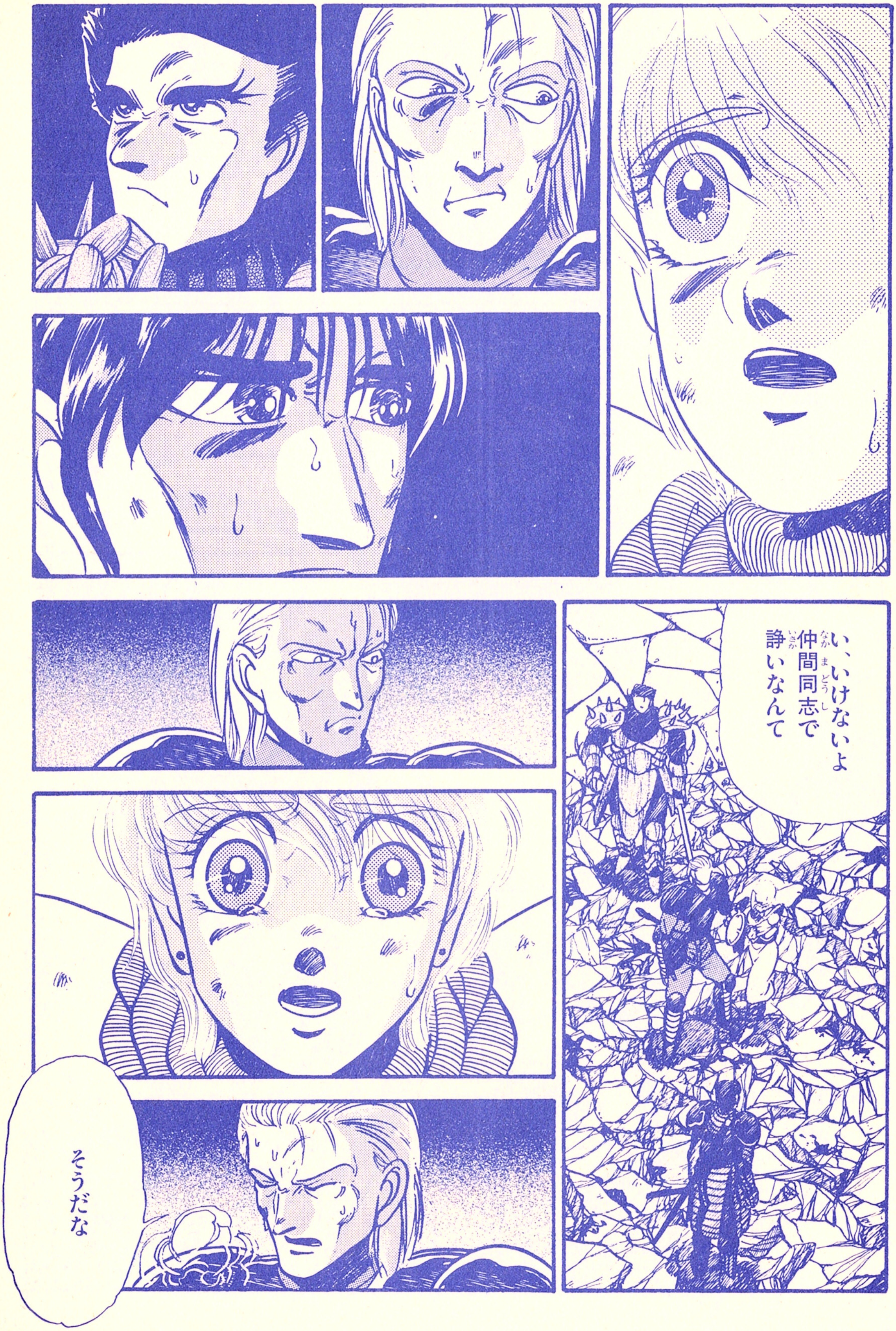

クッ
キャッ







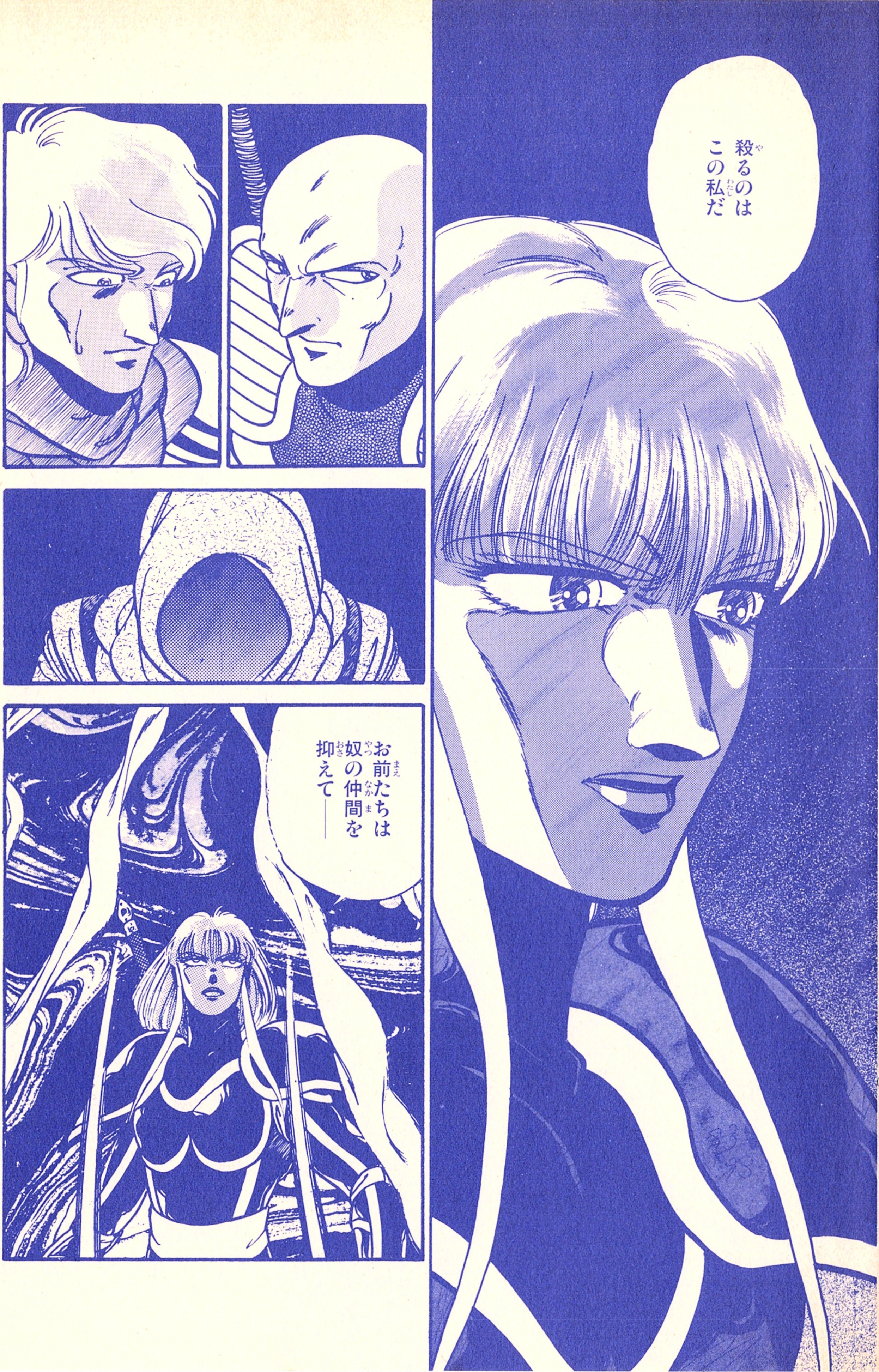

んなろ！
ショウ！
ダメ



い、いけないいよ 仲間同志で 諍いなんて
そうだな


殴りゃしないよ だから——な
あっ ご、ごめんなさい……
じーっ
視線が痛いな………
コッ
分かってりゃ良い——
——が危険な剣術を使う時は一言声をかけてくれよな
ショウ
——すまん
ああ——


肝に銘じておくよ
すっげえグズグズだぜ……
烈風斬か しかし通常の三倍強の威力は出ているな
ひょっとしてとんでもねえ化物を殺れって命令受けたんじゃ………
何もお前達に殺れとは云っていない


殺るのはこの私だ
お前たちは奴の仲間を抑えて——


火炎竜(ファイヤードラゴン)！


望むところ—
この程度でなくては鳳龍の剣の—
相手にならぬ!



次号Vol.11(5月18日発売)につづく!!

特報！

小説ウィザードリィ・シナリオ♯4

ワードナの逆襲

ファミコン必勝本1月19日号特別付録として掲載された
作品に大幅加筆。奇才・手塚一郎入魂の一冊、近々登場。
これがRPGノベライゼーションの最高傑作となる!!

THE RETURN OF
WERDNA
WIZARDRY
SCENARIO
♯4
BY ICHIRO TEZUKA

鋭意執筆中！

手塚一郎・著　予価980円　6月上旬発売予定

第1巻解逅編 定価906円



第2巻死闘編 定価906円



第3巻黎明編 定価900円



コミック版
ウィザードリィ
石垣環・作
ベニー松山・協力

このコミックが、ウィザードリィのキャラクターたちに新たな命をふきこんだ。剣と魔法の世界の幕開け、そして冒険者たちの命を賭した闘いが、いま始まる……。ＣＰＵよりも胸にせまる、迫力です。

ウィザードリィ外伝第1部



ギルの迷宮
石垣環・作
定価900円

ホウライ国の若き侍・ショウとリルガミンと姫将軍ルーシィディティの宿命の戦いが始まろうとした瞬間、2人の身体は奇妙な迷宮へと転移させられる。そこで待ちうけていたものは、魔道士ギルとの想像を絶する闘いだった……。

小説ウィザードリィ



隣り合わせの灰と青春
ベニー松山・著
定価1010円

プログラムに封印されたウィザードリィの魅力を、活字が解き放つ。ベニー松山が描く、評論家各氏賞賛の新世代ファンタジー！……漆黒の世界からの覚醒、血潮冷えし肉体に宿る、蒼い魂。これが、ウィズの粋。



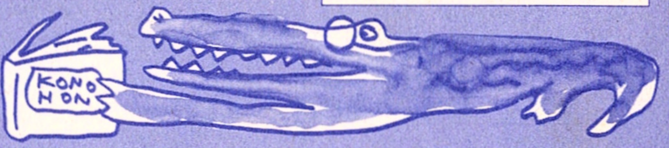
ウィザードリィのすべて
ベニー松山・著
定価1200円

ファミコン移殖版ウィザードリィのすべてがわかる完全データブック。迷宮世界の森羅万象を徹底解析。①「狂王の訓練場」⑪「リルガミンの遺産」を収録したこの一冊、ウィザードリィ探索者の心強い道標です。

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

この本を読め!!

by柴尾豊太郎



第六回　『ミザリー』

スティーヴン・キング著・文藝春秋

ほんとうのホラーは「女」なのだ!?

つい最近、ＡＶ機器があふれかえった我が家に、猫２匹とエレクトーン、それに女性が一人やってきた。

結婚してしまったわけなのだ。

ご存じの方ならうなずかれると思うが、とにかく結婚というものは非常にめんどくさい作業の連続なのだ。おまけに、それまでたったひとりで気ままに暮らしていた部屋に、もうひとり別の女性が暮らしているという事実は、ぼくの想像をはるかに超えて、驚き、とまどい、緊張感、その他もろもろをあたえてくれる。

せいぜい、ご近所の迷惑にならない程度にボリュームをあげてふけっていたＬＤの鑑賞も、同居人の同意を得なければ勝手に楽しめなくなったし、本を一冊読むのにも、思いがけないほど、同居人が気になってしまう。

まあ、いろいろあるわけだが、身近に暮らしてみて、女性というものについて、はじめてわかることも盛り沢山で、けっこう楽しんでいたりもしている。

いまでは妻帯者（うう…）になってしまったぼくだけど、独身時代の最後に読んだ本のことを考えると、なかなか暗示的で、ちょっと恐くなってしまう。

その本は「ミザリー」。「シャイニング」「デッドゾーン」等、モダンホラーの旗手スティーヴン・キングの最新刊だ。この「ミザリー」、じつに恐かった。

雪道のスリップ事故で、意識不明に陥った流行作家、ポール・シェルダン。気がつくと「ナンバーワンの愛読者」と自称する熱狂的女性ファンに看病されていた。雪に閉ざされた家で、半身不随になって逃げることのできない作家と女のふたりの日々が始まった。

この女、ひどいやつなんだ、作家の人気シリーズ「ミザリー」の最新刊で、主人公ミザリーが死んでしまうのに怒って、とんでもない要求をしてくる。

「大切なのはミザリーよ！　あんたが彼女を殺したんだ！人殺し！」

家にタイプライターを運びこみ、作家自身に女ひとりのための新作を書けと無理強いしてくるのだ。死んでしまったはずの主人公を生き返らせ、作家は物語を書き綴っていく。密室のなかを、じわじわと狂気が満ちてくる。語り口のうまさには定評のあるキングだけあって、読んでいるぼく自身、「ああ、それはやめてくれ」と何度も叫びそうになってしまった。とにかく恐いんだ。

キングの書きたかったのはファン心理の恐ろしさなんだろうけど、結婚直前で、ちょっと憂鬱になっていたぼくは、妙に「女」の恐ろしさに感じいってしまった。

自分の精神の奥の聖域とも言えるところに、実に簡単に足を踏みいれてこられる恐ろしさ。十年間、一人暮らしを続けてきたぼくにとって、「妻」という名の異分子を取り入れるのは何となく恐い。その恐さが、「ミザリー」によって増幅されるようだ（まあ、奥さんにしてもそれと同じことは言えるのかもしれないが）。

ただひとつはっきり言えるのは、たしかにこんな状況は恐いものだけど、その恐さを上回るほどの精神的なメリットが結婚にはある。うん、ぼくは幸せだよ。

ちょっと、「必本」とは関係ない話になってしまったけど、今回はのろけということで、許してね。



➡『ミザリー』スティーヴン・キング著、矢野浩三郎訳、文藝春秋（２０００円）この本を読み、映画「クローネンバーグのブルード」を観ればきみも女性恐怖症になれるぞ。ぼくももっと早く「ミザリー」を読めば、結婚なんて恐ろしいことはしなかったのに…。かえすがえすも残念なのだ。

DRAGON LORE
最後の竜に捧げる歌Ⅱ

SCENE⑥
精霊達



by 外薗昌也
原作/手塚一郎

●前回までのあらすじ／すべてを呑みつくす死の砂漠「大喰らい」の拡大を止める手がかりをにぎっていた師・フレシアはかって女魔法使いのグレイが兄と慕ったアクィナスに殺されていた。涙と決別したグレイとアクィナスの死闘は続く!!

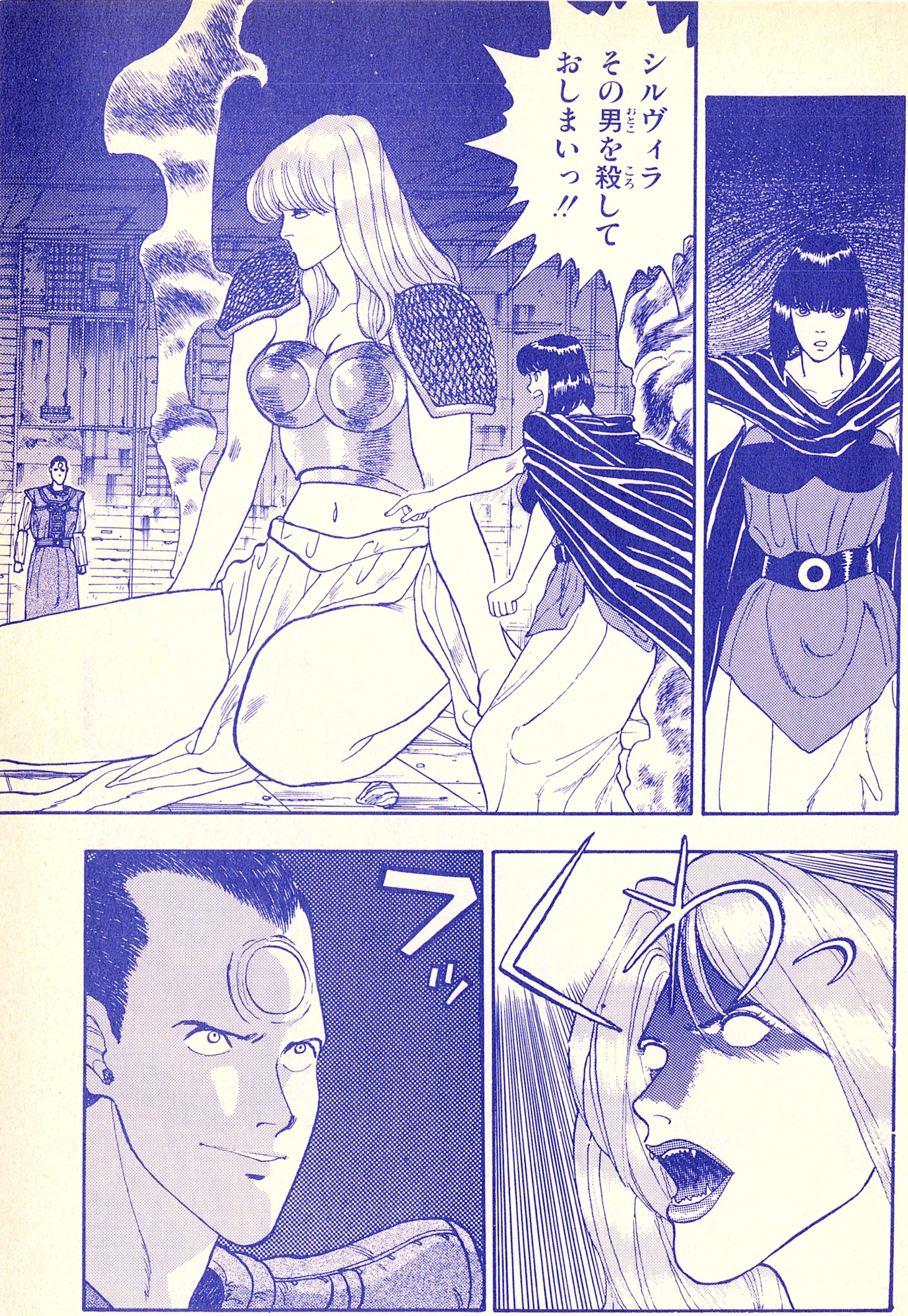


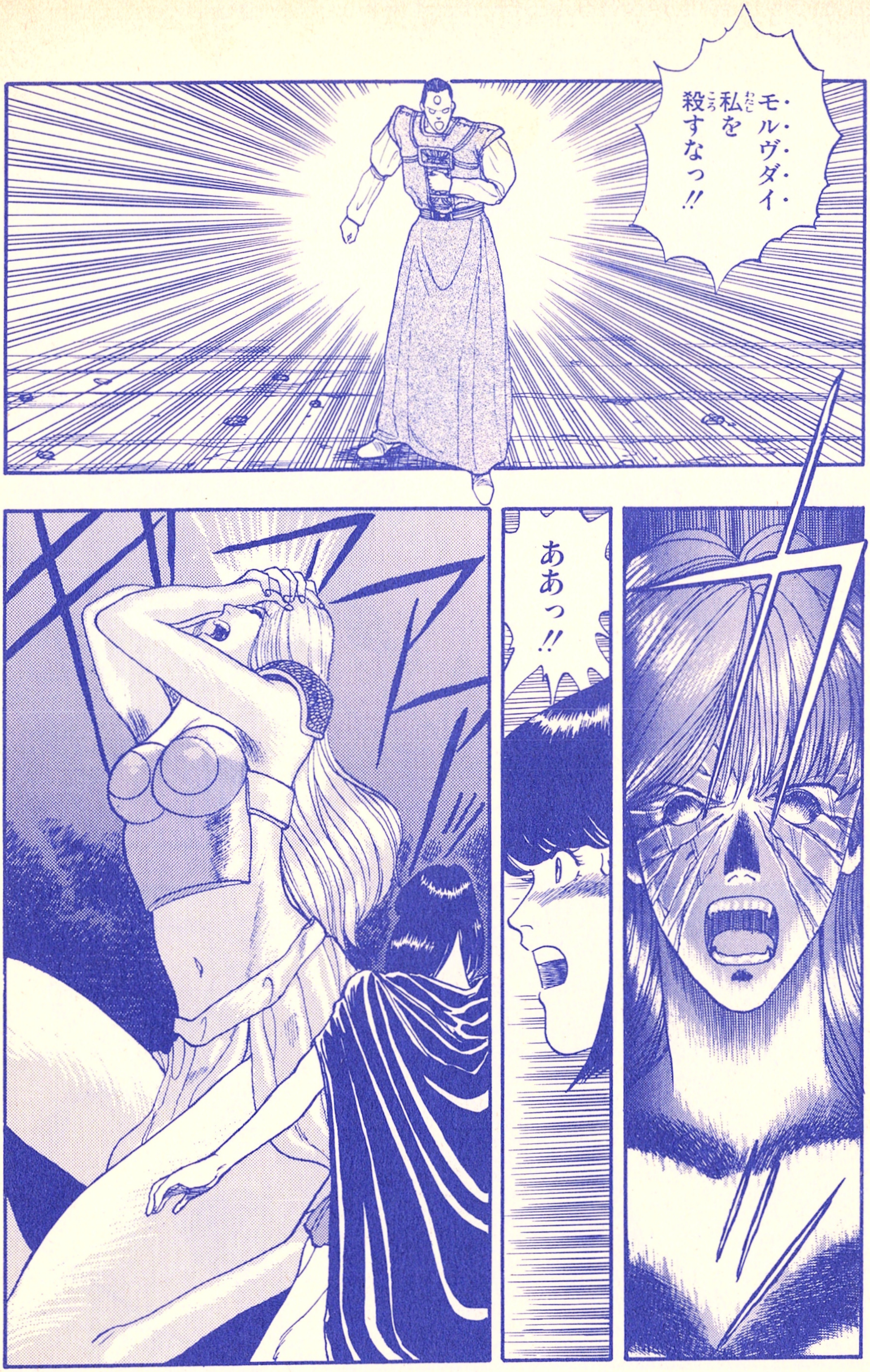
偉大なる自由の象徴っ 森をふるわせ
大地を渡る風の精！ 我が友 シルヴィラ!!
ズオオオオ
出でて我が導きに従えっ!!

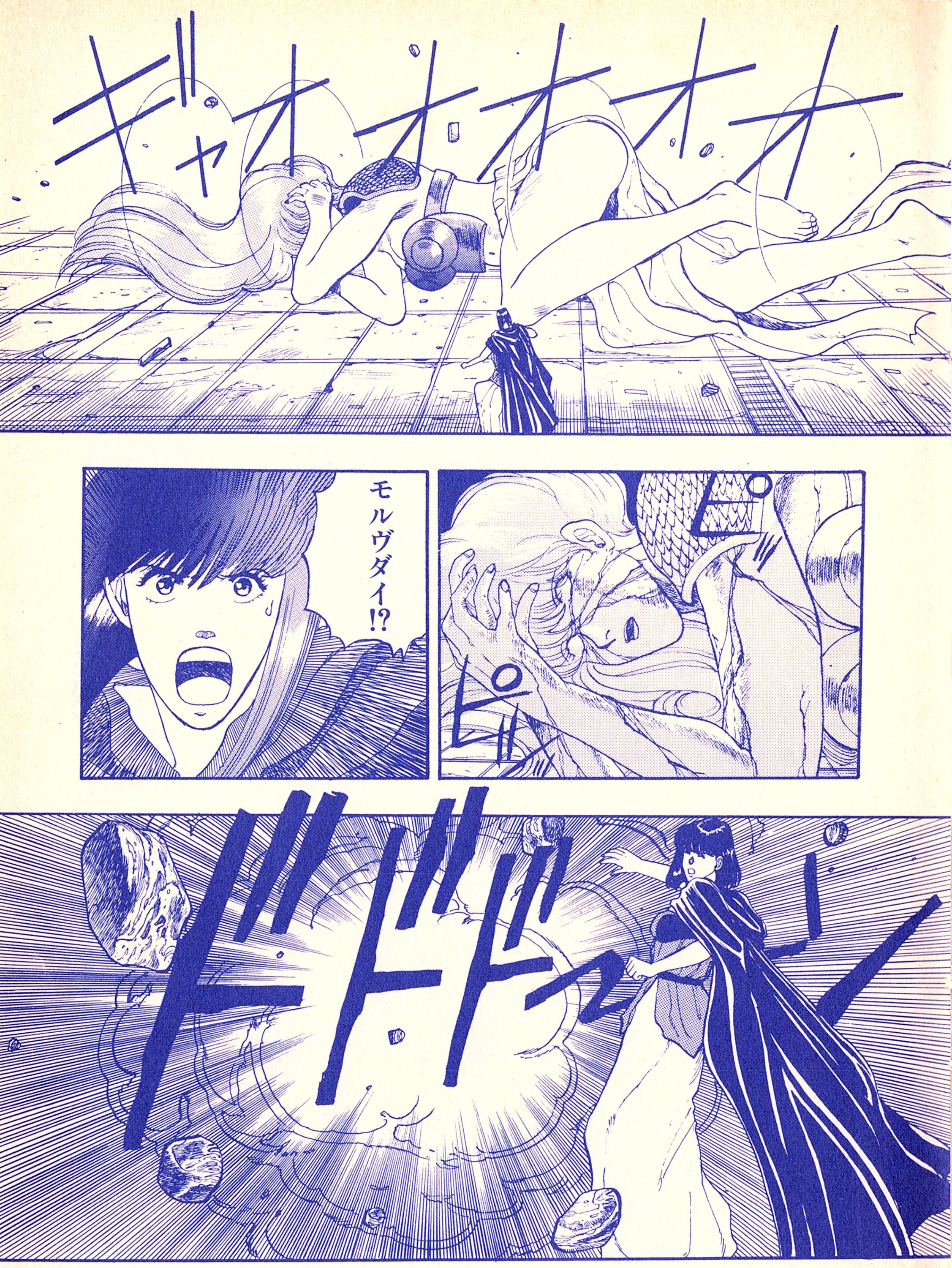

ズン
シルヴィラ!!
何か? 私をよんだ人間の娘よ
は!!
ははっ!
グレイ お前の技も出つくしたようだな!
なにっ



風の精霊シルヴィラの本当の名なら、俺も知っているんだぞ
!!
嘘をつくなっ!! お前は錬金術を習っていたではないか!
くっくっくっ
フレシアの書物は全て盗み読んでたんだよ!
夜中にこっそり、ぬけだしてな……
なっ なんて奴!!
もし精霊が相反する命令を同時に受けたら……
どうなるか前から見たかったんだ くっくっくっくっ

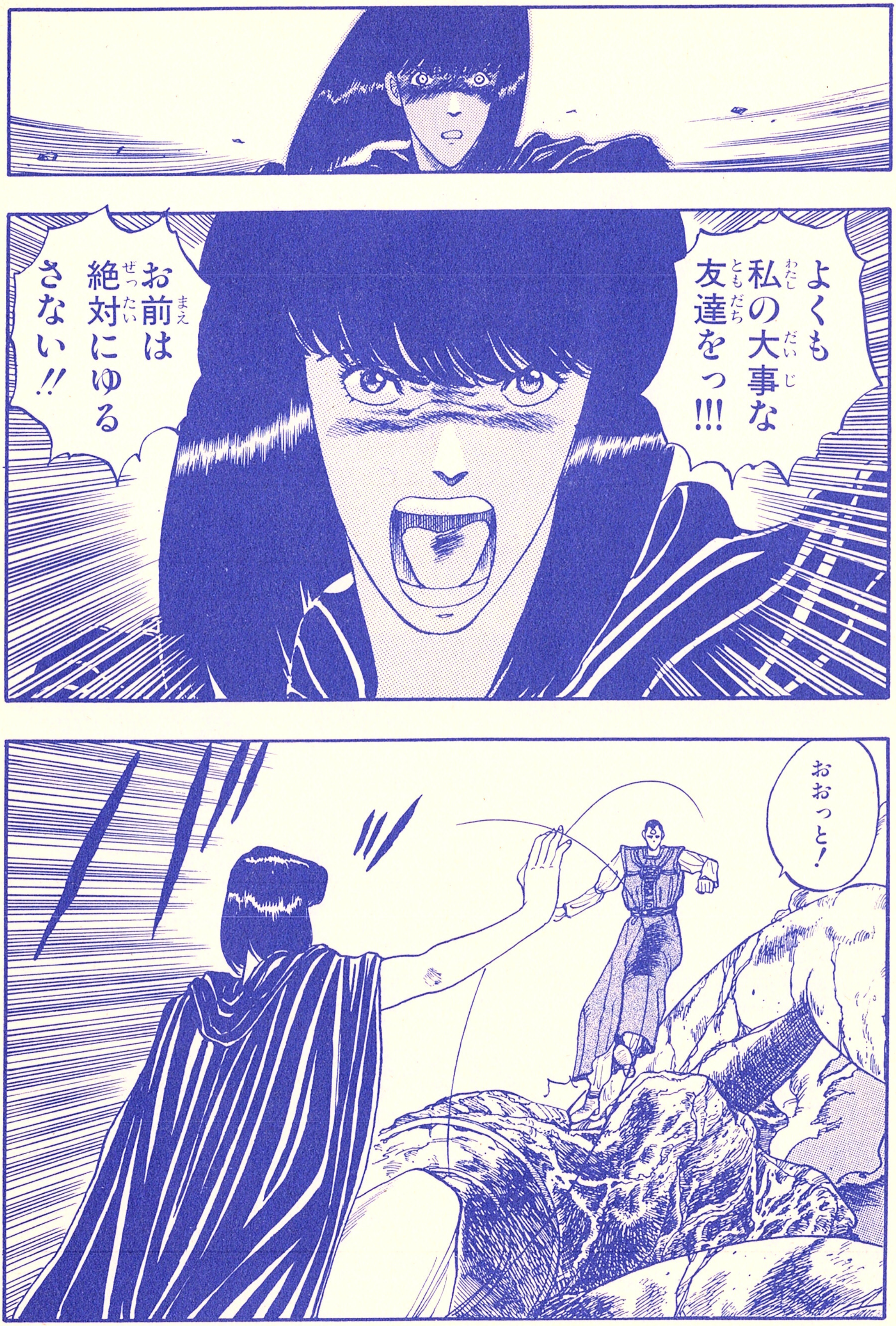

シルヴィラ その男を殺して おしまいっ!!
フッ


モ・ル・ヴ・ダ・イ・私を殺すなっ!!
ああっ!!


ギャオオオオ
ピ
ピ
モルヴダイ!?
ドドドッ

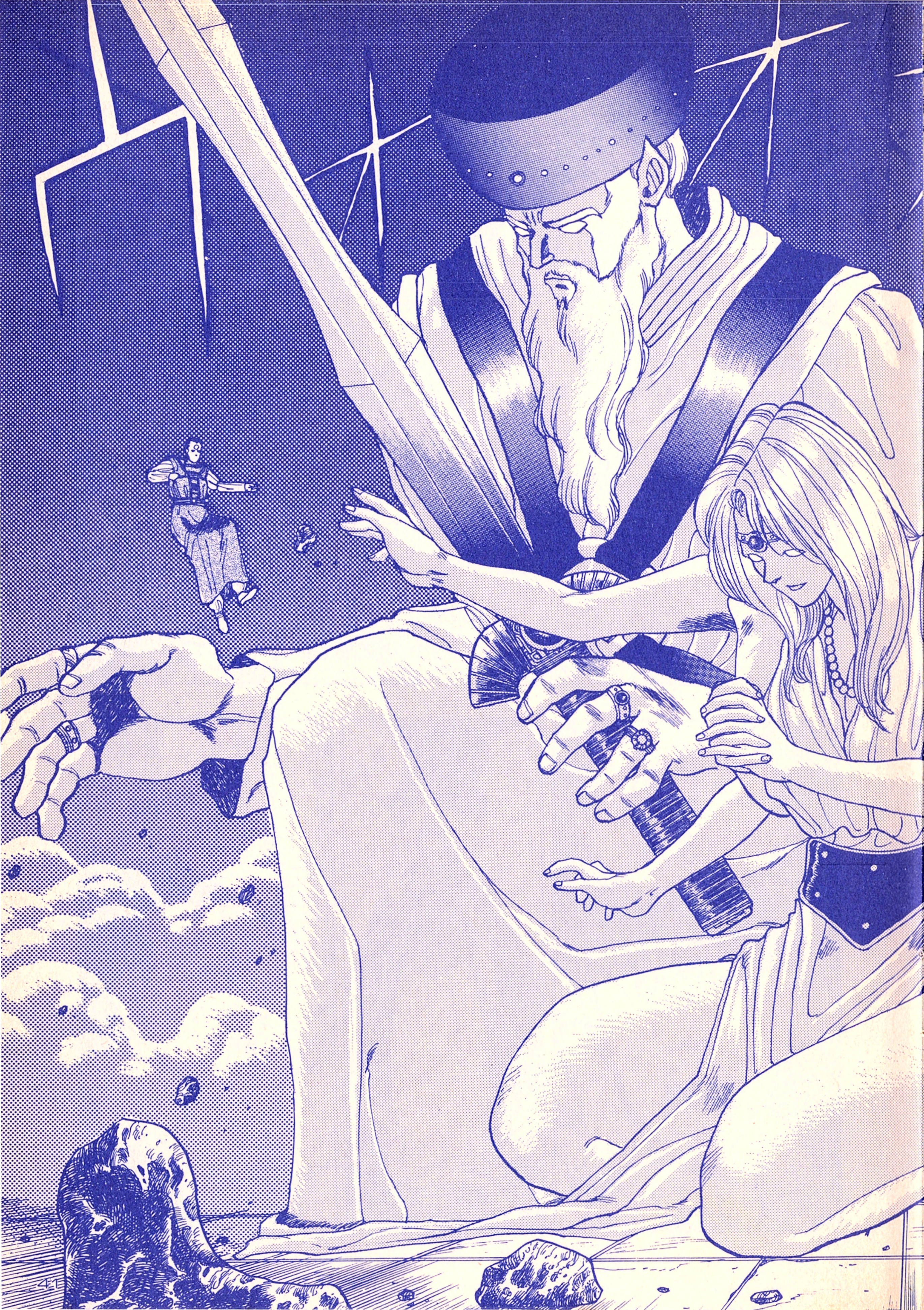

シルヴィラ…!!
なるほどこうなるわけか…
面白い見せ物だったぜ!


かわいそうな事したなあ グレイ……
トン
さあ 次は どんな手で くる? グレイ……

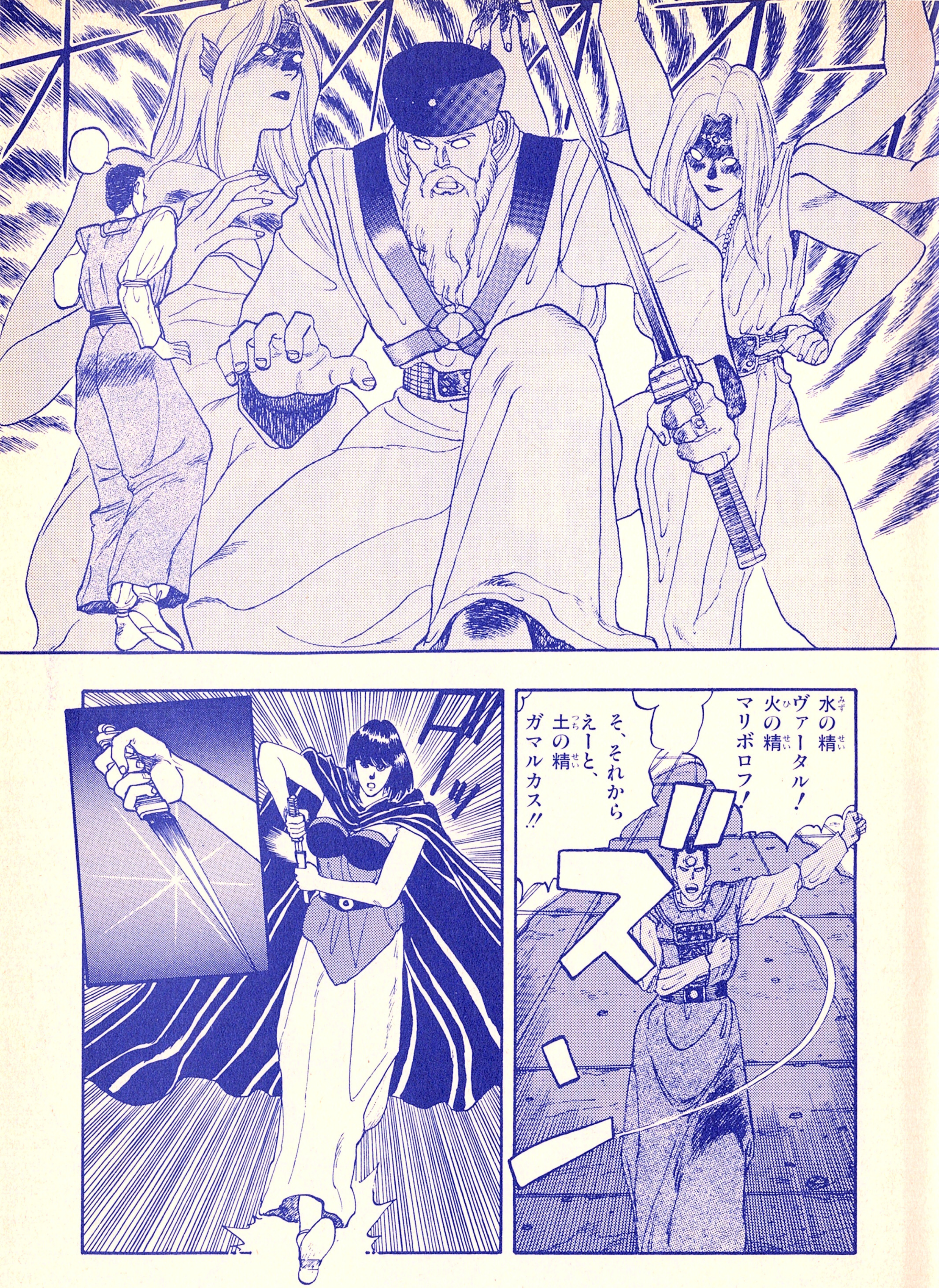

よくも私の大事な友達をっ!!!
お前は絶対にゆるさない!!
おおっと!

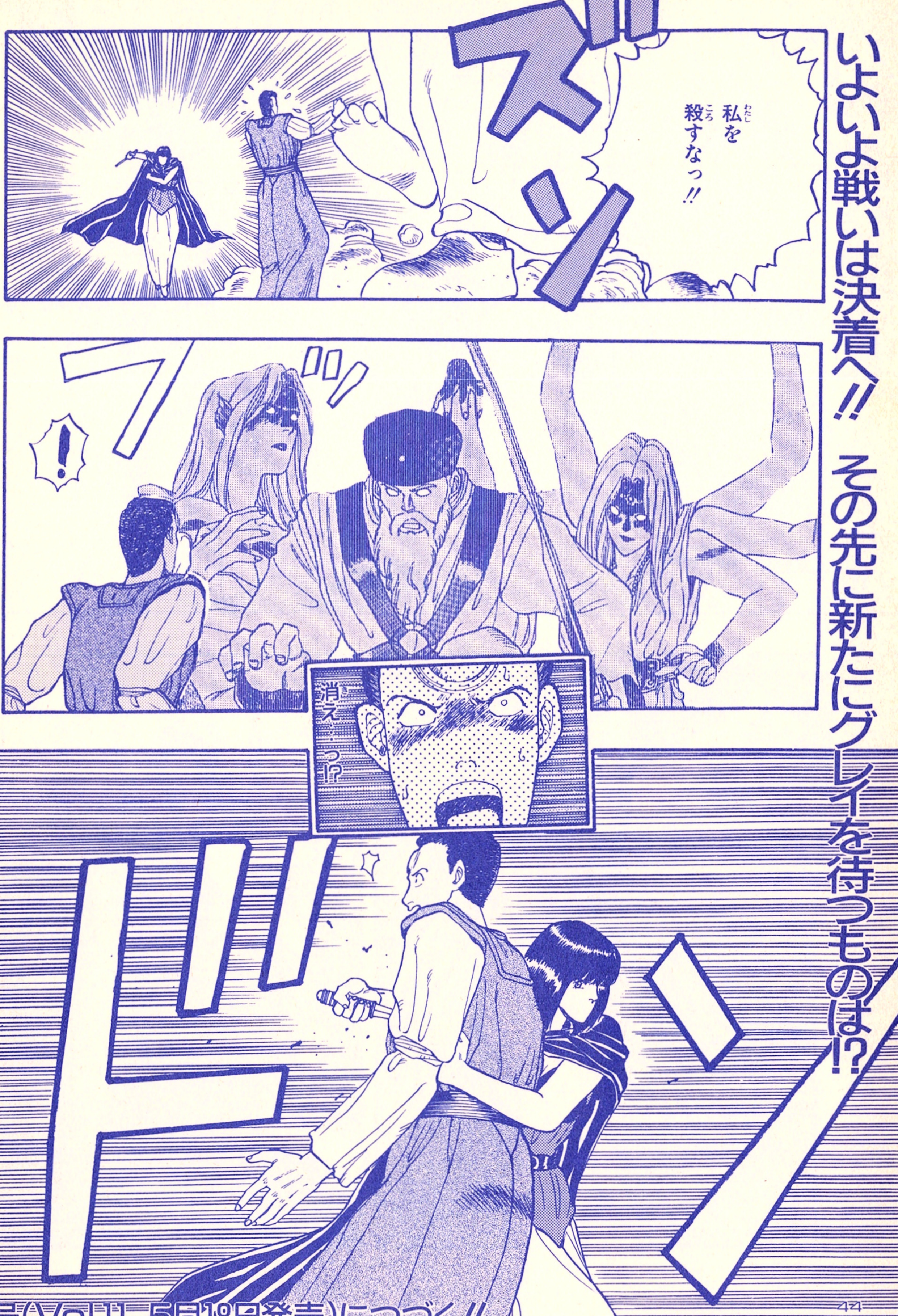

我らが母なる大地、生と死を司る精・ノウセイム現れ出でよ！
我らを育てし大いなる水の精・ウェンディーア、その冷たき力を我に！
恐りと破壊をよぶ火の精高貴なるサーラメスその技を我に示せ!!
ほう こりもせず また精霊を よぶのか！
ご苦労な事だな！






ダッ
今度は精霊が3匹か！
これで、お前の持ち駒はすべて出尽したようだ
あの男を殺しなさい!!


水の精ヴァータル!
火の精マリボロフ!
そ、それから
えーと、土の精
ガマルカス!!
ズー

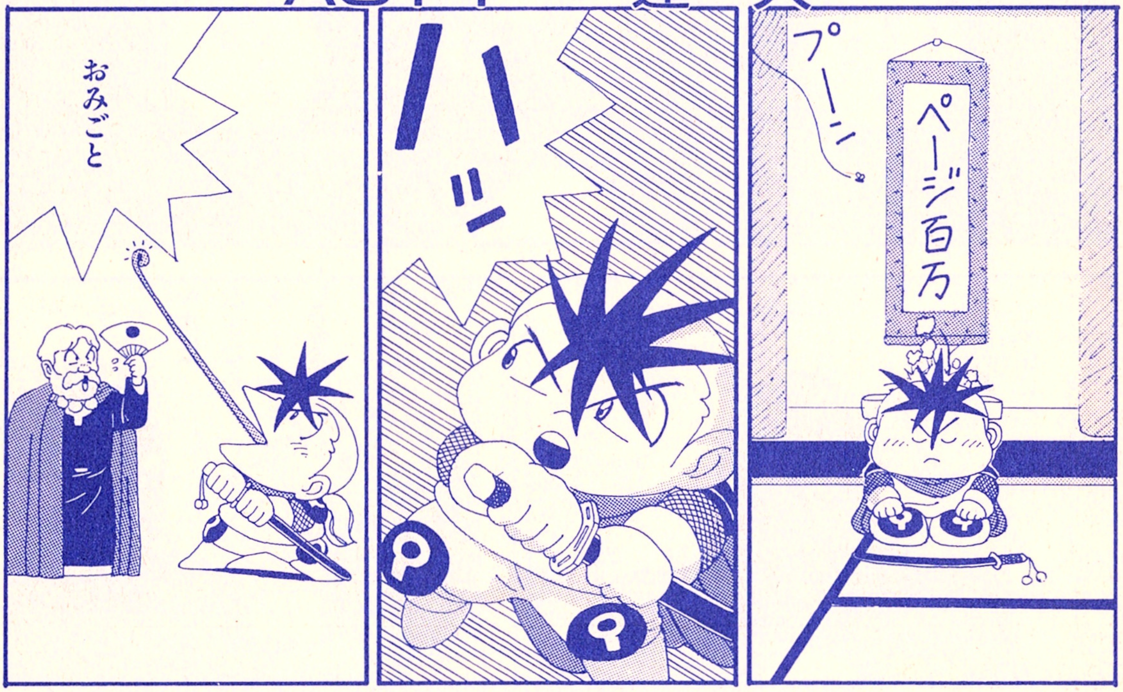


次号(Vol.11 5月18日発売)につづく!!

4コマからオムニバス・ギャグへてっぽう丸のアホ光線がますますさえる!!



ACT 1 達人



ACT2　予言者


占
偉大なる予言者は
かく語りき
今日は
2―6がかたい
OGURI CAP.
馬
四月の花はマーガレット
花言葉は真実の愛
寒冷前線の影響で
関東地方雨もしくはくもり
何かちょっと
ちがう様な気がする
おっ
今度はなかなかまともそうじゃないか
何を占うかね
伝説の勇者の誕生についてかね　それとも



？
レディー
ゴーッ
わしの勝ち
何を占うかね
せこい仕事はしないぞ
かつどん
予言者はもうやめじゃ

ACT3　魔法使い



めくるめくてっぽう丸ワンダーランド　次なる新境地は!?



Wizardry®・II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第14回

伝説の宝珠はもたらされた。
だが、天変地異は続く。
ガッシュらの消息は杳として知れず
迷宮の落盤は捜索隊を呑み込んだ。
果たして、異変の原因とは何か?

作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十五章〕原因

俺とディーが案内された時には、礼服姿のザザはすでに食卓に着いていた。俺たちに視線を向け、軽く笑みを浮かべてみせる様子には、去り際の突き放した態度は微塵も感じられない。

マイノスと、招待者のベイキ女王はまだ姿を現してはいなかった。

広い会食室の中央に置かれた食卓は、周囲に十五、六人が楽に座ることができる円形のものだった。

俺は軽い驚きを覚えていた。

この晩餐会は、ベイキ女王自身が主催したものだ。恐らく、このテーブルを用意するように指示したのも女王自身だろう。

それは、二つの重要な意味を持っていた。

一つは、女王と俺たちが同席するということだ。

仮にも一国の君主であるベイキ女王と、今は宝珠の探索者として重要な地位にあるとはいえ一介の流れ者に等しい俺たち冒険者が同席するとなれば、通常は厳然とした席次のある長方形のテーブルを用いて女王が上座に座ることになる。

だが、円卓には席次の上下が存在しない。そこに俺たちと女王がともに座るということは、この席では身分の差を取り払うという意味を含んでいるのだ。意識していなかったにしろ、これまで俺たち冒険者に対して地位と権威を振りかざして、傲慢と言えるほどに振る舞ってきた女王らしからぬ行為だった。

もう一つは、王族の円卓での会食がリルガミン王国の歴史上、極めて重大な局面に行われたということで知られていたからだった。

その会食は百年ほど前、ベイキ女王の曾祖母に当たる女性――ダイヤモンドの騎士となった実弟アラビク王子とともに魔人ダパルプスを打ち倒したマルグダ女王が、失われたグニルダの杖を取り戻すため、自らダパルプスの呪いの迷宮に潜る決意を固めた際に催されたのだ。

マルグダ女王は円卓に臣下を座らせると、絶望的な探索へ赴くとは思

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍〝ル・ケブレス〟の護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアとディー、ザザは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。分裂、増殖を繰り返す妖獣に苦戦しながらも、重傷を負い生還したマイノスの援護で辛くも女王を救う三人。もうひとりの妖獣エレインが冒険者の宿に向かったのを知り、ジヴラシアとディーはすぐさま転移の呪文で跳ぶ。しかし時すでに遅く、残留組の悪の冒険者は全員妖獣の餌食となっていた。分裂した妖獣たちを全滅するべく、ディーは爆炎の呪文で宿を焼き払う。ジヴラシアは逃げ出したエレインを屠ったが、同時に石化され、同化されかけたところを謎の男に助けられたのだった――。

主な登場人物

- ●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ●ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ●ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ●ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- ●マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- ●フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- ●アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- ●エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ●〝ル・ケブレス〟……迷宮を支配する龍。〝平衡〟の守護者。

えぬもの静かな口調で語ったと言う。
「ダパルプスの支配を脱した今もなお、破滅の翳はこのリルガミンから去ろうとはしません。いえ、あるいは以前にも増して。すでに少なくない数の者たちが、リルガミンの平和を願いながら呪いの穴で命を落としました。もはや、座して杖の帰還を待ち続けることはできません」
臣下たちの中で腕に覚えのある者は、それならば私たちがと名乗りを上げかけた。が、女王はそれを制した。
「勇気を示すべき者、それは私に他なりません。弟アラビクと戦いの術を学び、高位魔導師となったこの私が」
さればなおのこと、と今度は全員が同行の意を表した。それが許されぬなら、死を選ぶと聞かぬ者もいた。
女王は微笑むと、しかし断固として臣下たちを押し止めた。
「これは王としての命令ではありません。円卓にともに着いた時から、私はあなたたちの主君ではなく、あなたたちもまた家臣ではないのです。この国を愛する同志のひとりとして、私の気持ちを察して下さい。もし私が帰らぬばかりか、あなたたちまでも失い、舵を取る者すらいなくなったこの国の行く末を憂える気持ちを――」
女王の言葉に、もはや異を唱える者はいなかった。ただ、誰もが死よりも辛い悲しみを味わっていた。そして、死を覚悟して輝きをいや増したマルグダ女王の、神々しいまでの美しさをその目に焼きつけながら、再びその姿を見ることができるよう祈っていたと言う。
その祈りを神が聞き届けたのか、会食が終わらぬうちに伝令たちが次々と駆けつけてきた。恐ろしく腕の立つ冒険者たちが、何かに導かれたかの如くに続々とリルガミンに集まってきた、と。
その後、彼らの超人的な活躍でグニルダの杖は取り戻され、ダパルプスが引き金となった王国の危機は回避された。
結局マルグダ女王は魔物の餌食になりはしなかったのだが、円卓での会食の逸話は万人の知るところとなった。女王がその地位を捨て、リルガミンの一市民として決死の勇気を示した場が円卓なのだ。
それだけの意味を込めて、ベイキ女王が円卓を用意させたのかどうかは判らない。妖獣に襲われた恐怖で失神し、目を覚ましてみたら宝珠があったという夢のような話に浮かれて、祝いのつもりで身分差を排したのかも知れなかった。
晩餐などと言い出したからには、現在迷宮内で行方不明になっている連中のことなどもう、浮かれた女王の念頭にはないのだろう。俺は、どのみちあの小娘が冒険者風情の生死を気にかけている訳はないと思っていた。
もしそうであるにしろ、この場に円卓が用意されていることは驚きに値する。俺の傍らのディーも低く呟きを漏らした。
「無礼講だったら言ってやりたいことは山ほどあるけど」
円卓にはザザの他に、四人の老人が座っていた。どの老人もかなりの高齢で、そしてひとりとして同じ種族の者はいなかった。人間、ドワーフ、ノーム、ホビットの四種族だった。彼らの貌には長い人生の間に培われた叡智の皺が刻まれ、その瞳には世界の深淵に隠された真理を探る光が宿っている。
五賢者――リルガミンの賢者会議の中核をなす、各種族から一名ずつ選出される最高の知性を秘めた者たちだ。現在のリルガミンの行政を担い、歳若い女王の摂政を務めている。
宝珠はこの老人たちに託されている筈だった。卓上にないところを見ると、どうやらまだ到着していないエルフの賢者が持っているらしい。
彼らは俺たちを見ると、静かに深く一礼した。この日までの宝珠探索の労をねぎらう意味なのだろう。体格が全く異なる四人だったが、その礼をする様は不思議に整然と揃って見えた。
俺たちはザザのそばに案内され、腰を下ろした。
その時だった。
「……は、陛下はどちらにおられるのだ。お話がしたい。晩餐どころではない！」
叫び立てる怒声が、廊下の向こうから急速に近づいてきた。
円卓の全員の視線が集まる中、バン、とけたたましく扉が開く。
追いすがる召使と扉の外の衛士を押し退け、一人の男が躍り込んでき

た。

マイノスだった。礼服ではなく、甲冑の下に着こむ薄手の革鎧に身を包んでいる。今にも迷宮に乗り込んでいくような様子だった。

円卓を目にして一瞬怯んだようだったが、すぐに気を取り直し、マイノスは険しい目で礼服姿の俺たち三人を睨めつけた。

「仲間が迷宮で助けを待っているかも知れんという時に、着飾って会食とはいい御身分だな。悪の戒律の者などに期待した私が愚かだったようだ」

吐き捨てるような口調でマイノスは続けた。「たとえ私一人でも助けに行く。女王陛下にはよろしく伝えておいてくれ。こちらの宴会は貴様らに任せる、とな」

この侮蔑のこもった皮肉に、ディーが椅子を蹴立てて立ち上がった。顔を上気させ、殺気に似た気配を放っている。傍目にもディーが激昂しているのがはっきりと判った。

「訂正は利かないわよ」

興奮しているにもかかわらず、呟くように言った。

悪い傾向だった。こんな時のディーは、頭に完全に血を昇らせている。こうなると何をしでかすか判ったものじゃあない。この場で呪文の詠唱を始めることもあり得るのだ。

一方のマイノスは、若干の戸惑いを見せていた。奴としては嚙みついてくるのが俺だと予想していたのだろう。善の戒律の者の御多分に漏れずフェミニストのマイノスは、ディーと一触即発の状況になるとは思いもしなかったのだ。

だが、もはやディーはその様子に気づかぬほど怒り狂っている。

ザザはお手上げという仕草で俺を見た。どうするかは、任せるという意思表示だ。

マイノスの皮肉が俺に向けられていると知りながらも、何故か俺はディーを止めてやる気になっていた。

「おい、ディー――」

ふいに俺は口ごもった。マイノスの背後から近づく足音が耳に入ったからだ。

「お止めなさい！」

凛とした声が室内に響き渡った。

弾かれたように振り向いたマイノスが、息を呑んで立ちすくんだ。

そこには五賢者の一人である老エルフを従えたベイキ女王の姿があった。

俺もザザも、驚愕を隠すことはできなかった。

五賢者を除いた全員――衛士や召使たちを含めて――が女王の姿に目を奪われ、驚きを露にしていた。

女王は漆黒の礼服を身に纏っていた。派手な装飾は一切ない、葬礼の際に用いられる喪服だった。頭に王冠はなく、豊かな栗色の髪は後ろで無造作に束ねられている。

しかし、俺たちの目を釘付けにしたのはそんな装いなどではなかった。最後にベイキ女王を目にしたのは、つい五、六時間前のことだった。あの時の女王は、いつもより大人びてはいたが、あくまでも美しい娘に見えた。

今俺の前にいるのは、隠しようのない憂いを帯びながらも、高貴な美しさで光り輝かんばかりの女性だった。そしてそれが数時間前まで――いや、ここでその姿を目の当たりにするまで、俺が小娘扱いしていたベイキ女王なのだ。

激昂していたディーですら、女王を見ただけですっかり毒気を抜かれたようだった。

あと数年は相手にならぬとたかをくくっていた少女が、いきなり強力な美のライバルとなって現れたのだ。その前でいつまでも鼻息荒くマイノスと睨み合いを続けているのは得策ではない。

その場が収まったのを確認して、女王はマイノスに語りかけた。

「仲間を救いたい気持ちは痛いほど判ります。ですが、今のあなたは状況を知らずに闇雲に走ろうとしています。まずはお座りなさい。決して時間の浪費にはなりません」

落ち着き払った、有無を言わさぬ口調だった。ともすれば感情的にな


masaki

りがちだった女王からは想像できない堂々とした態度だ。
マイノスは黙って一礼し、円卓の俺たちとは少し離れた席に腰を下ろした。
これまでのベイキ女王は冒険者にとっての厄介者であり、善の戒律の者を含めたほとんどの冒険者は女王自身に忠誠心を持ってはいなかった。
が、マイノスは違っていた。
奴は今では数少ない、マルグダ女王から王国騎士の称号を授かった英雄の子孫だった。俺が忍者という特殊な職業を御先祖から受け継いだように、マイノスもまたロードの職業と、そして騎士の称号をも受け継いでいるのだ。
それ故に、先祖がリルガミンに誓った忠誠は今もこの男の中に息づいている。命令口調ではなかったにせよ、マイノスにとってベイキ女王の言葉は従うべき君命だった。
もっとも他の冒険者であったとしても、今の女王に逆らえる者はいなかっただろう。女王の言葉には以前にはなかった重みがあり、高貴な血筋に裏打ちされた美しさには威厳すら漂っていたからだ。
ベイキ女王はゆっくりと円卓を回り込み、丁度俺とは正反対の位置にある席に着いた。その隣席にエルフの賢者が歩み寄る。
老エルフは胸の前に、柔らかそうな厚いクッションを捧げ持っていた。錦の布がかぶせられていたが、その下に何が置かれているのかは明らかだった。
賢者は、女王の前に恭しくそのクッションを置くと、自らも円卓の一席に着席した。
ディーも腰を下ろしていた。
これで出席者の全員が円卓に着いたことになる。俺たち二人にマイノス、五人の賢者、そしてベイキ女王の十人だ。
女王は一同を見回すと、目の前に置かれたクッションに手を伸ばし、かぶせてある布をゆっくりと取り除けた。
一瞬、眩い光が室内に溢れたかに見えた。
そこに、直径十センチ余りの球体があった。磨き抜かれた美しい水晶球だ。
だが、その色を何と表現したらいいのだろう。銀色の輝きを放ちながらも、その滑らかな表面にはありとあらゆる色彩が陽炎のように揺らめいている。しかも、水晶は透明なのだ。
予想通りだった。
これこそが、俺たちが探し求めてきた宝珠に違いなかった。森羅万象の理をそこに映しだすという、超古代より伝わる伝説の神器だ。
その神秘的な光輝を初めて目の当たりにした俺は、咳きひとつ漏らすことなく吸い込まれるように宝珠を見つめていた。
俺は宝石の類は嫌いじゃない。が、それは金の代わりになるだけの価値が認められているからで、宝石自体の美しさなどに興味はなかった。それを金に換えてくれる奴がいなければ、俺にとっては道端の石ころと変わりがないのだ。
その俺が、宝珠の輝きに見惚れている。純粋に、その美しさに魅了されているのだ。
これまでに目にしてきた宝物など、どれも足下にすら及ばない。一体どれほどの魔法技術をもってすればこれだけの宝珠が造り出せるのか、俺には想像もつかなかった。
ディーも同様に、宝珠から目が離せなくなっていた。俺と違って宝石に目がない女エルフにとっては、この段違いの美は衝撃的ですらあっただろう。
すでにそれを目にしているザザでさえ、宝珠の魔力めいた吸引力には抗えないようだった。さすがにこれを腹に埋め込んで持ち帰ったマイノスだけは、その時の苦痛が蘇るせいか冷静な視線を注いでいるに過ぎなかったが。
俺たちが宝珠から受けた感銘を消化するだけの間を取ってから、ベイキ女王はおもむろに口を開いた。
「あなたたち冒険者の働きによって、ついに伝説の宝珠はリルガミンにもたらされました。何よりもまず、お札を言わせて下さい」
そう言って、信じられぬことに女王は深々と頭を下げた。

風よ。龍に届いているか

　何と、あのベイキ女王がだ。マイノスを含め、俺たちはただ唖然とする他なかった。ディーなどは首をすくめ、目を真ん丸に見開いて驚きと戸惑いを表現している。この場に足を踏み入れて以来驚きずくめだったが、この女王の態度ほど俺たちに衝撃を与えたものはなかった。

「お、お顔をお上げ下さい、陛下」

　恐縮しきったマイノスが慌てて叫んだ。己の主君に頭を下げられるなど、王国騎士には畏れ多過ぎて考えることさえ能わぬ事態なのだ。

　女王は頭を上げると、深淵の闇の色をしたその瞳でマイノスを見た。

「あなたがどれだけの勇気と苦痛をもってこの宝珠を持ち帰ったのか、それを考えただけでも頭が下がります。今は亡き私の父上も、きっとこうしたことでしょう」

　そう答える女王の姿には、父親に負けぬ国王であろうと背伸びを続けてきた十七歳の少女の幼さは微塵も感じられなかった。

「――しかし、支払った代償は大き過ぎました。探索の終局でこれだけの犠牲者を出してしまうなど、誰が予想し得たでしょう？」

　女王は宝珠に視線を落とした。「この円卓ですら、私たちだけでは広く感じてしまいます。私は……本当は、もっと大きな円卓を用意して、もっと盛大にお祝いをしたかったのに……」

　そのわずかな瞬間、女王は本来の十七歳の素顔を覗かせた。

　黒い瞳に、涙が光っていた。

　俺は自分の考えが誤りだったと知った。ベイキ女王は宝珠が手元にある今も、迷宮から戻らぬ者だちの安否を気遣っているのだ。

　そして、彼女が急激に少女から女性へと変身を遂げた理由も判った。化粧でうまく隠してはいるが、女王の目元には泣きはらした跡があった。

　恐らくはこの数時間、涙が涸れるまで泣きどおしだったのだろう。

　女王を変えたのは悲しみだった。不自由なく育ってきた王族の娘が、涙を流す以外に抑える方法のない感情を覚え、その心に人の世の苦渋を刻みつけたのだ。

　それは、愛する者を失った痛みに間違いなかった。

「陛下」

　マイノスの呼びかけに女王は顔を上げた。十七歳の表情は消え、再び女王の風格が戻ってくる。

「何故に私が彼らの探索に赴いてはならないのです。救助が早ければそれだけ助かる可能性も高いというのに、ここで足止めされては――」

「スケイルに入れねえんだよ」

　俺はマイノスの言葉を遮った。

「何？」

「目が覚めたばかりで何も知らねえんだろうが、落盤で入口が塞がっちまってるんだとよ。お前、他に侵入口を知ってるのか？」

　マイノスは沈黙した。迷宮内の落盤の情報に動揺の色が隠せない。

「我々は入れませんが、結界を利用しての脱出は可能でしょう。今は連中が自力で生還してくれることを祈るしかありませんね」

　ザザがあとを引き取った。が、この希望的な観測にも、マイノスの表情は暗かった。

「ところで、とっても大事なことなんだけど――」

　ディーが宝珠に視線を注ぎながら言った。「それが手に入ったんだから、異変の原因はもう判ったんでしょう？」

　もっともな質問だった。マイノスの腹から摘出されてから今まで賢者連中がこねくりまわしていたのだから、もう宝珠から答えを得ていてもおかしくはない。

「それは、私もこの場で報告を受けることになっています」

　そう言って、ベイキ女王は五賢者に視線を送った。「報告を」

　五賢者はそれぞれ顔を見合わせた。無言の相談の末、やはりエルフの賢者が代表に選ばれたようだった。

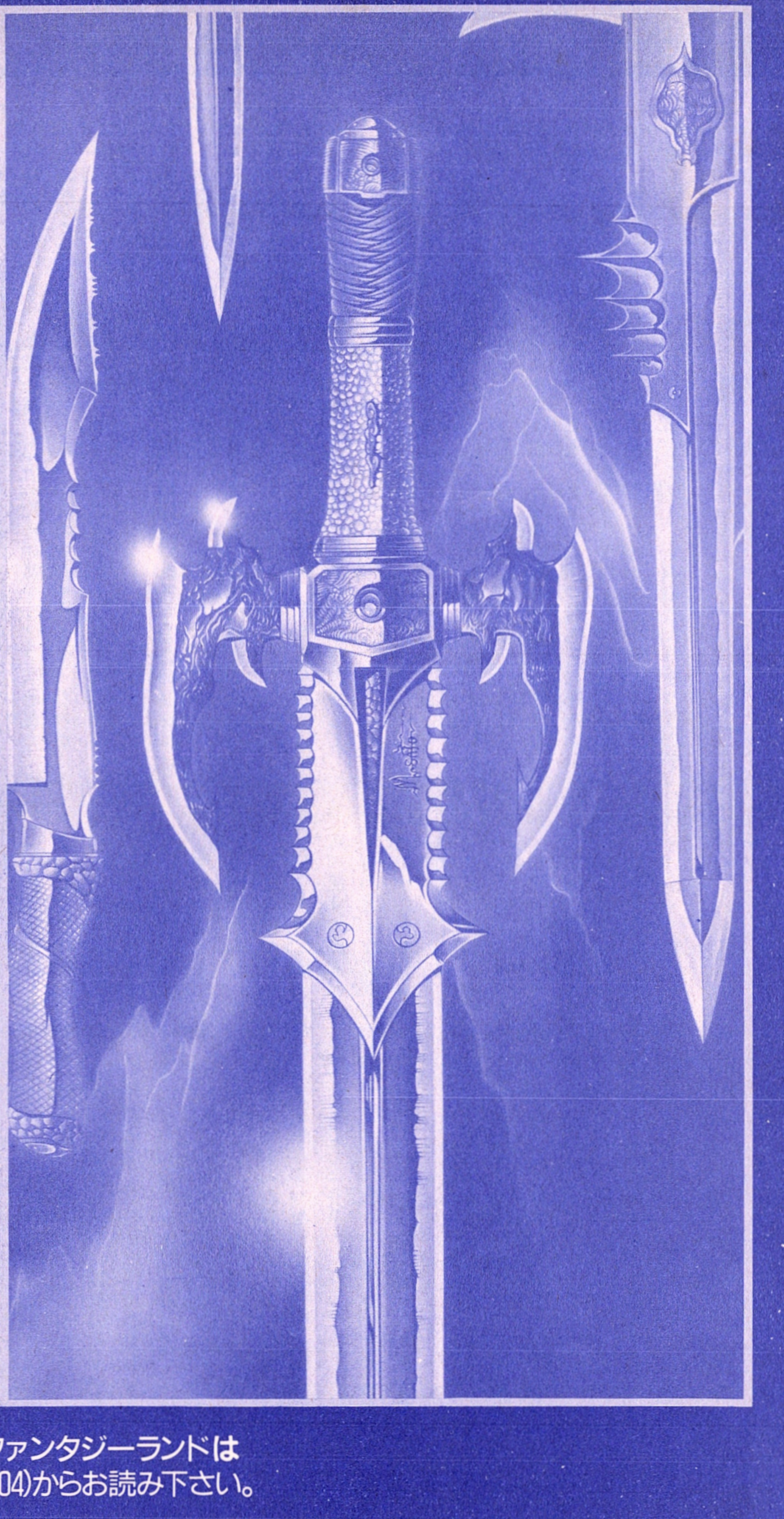
　老エルフは報告を始めた。

　だが、それは俺たちが期待していた吉報ではなかった。

（次号に続く）

特報!!
小説ウィザードリィ・シナリオ4「ワードナの逆襲」 手塚一郎・著
6月上旬単行本化決定!! 予約受付中!!

●本誌Vol.2号で別冊ふろくとして登場した同小説に大幅な加筆!新たなウィズ世界に御期待ください!



▶ファンタジーランドは
(P104)からお読み下さい。